待機児童解消加速化プラン

保育所整備の補助率かさ上げ

本県は7市1町に補助

厚労省　厚生労働省は「待機児童解消加速化プラン」への参加を希望し、同省に「待機児童解消加速化計画」を提出した351自治体の取り組みを採択した。このうち財政力指数が1未満の市区町村の国庫補助率をこれまでの2分の1から3分の2にかさ上げする保育所緊急整備事業では、本県の7市1町など226市区町村を補助することを決めた。

同省は、保育ニーズのピークを迎えるとみられる2017年度末までに待機児童を解消したいと考えており、13年度～14年度の2年間で約20万人分、17年度末までの5年間で合わせて約40万人分の受け皿を確保する。

保育所緊急整備のほかには、賃貸物件による保育所整備事業で62市区町村、幼稚園預かり保育改修事業で20市区町村、家庭的保育改修事業で9市区町村を採択。

同省は、自治体の加速化プランへの参加を随時受け付けることにしており、今後、さらに加速化プランへの参加自治体と待機児童解消事業を実施する自治体が増える見通しだ。

なお、本県の7市1町は出水市、薩摩川内市、曽於市、霧島市、南さつま市、志布志市、奄美市、龍郷町。

10月4日まで募集

省エネデザインアワード

環境省

環境省は「第4回省エネ・照明デザインアワード」を実施する。照明器具の設置や光源の使い方に優れ、省エネと魅力ある空間づくりを両立している施設などを募集する。募集期間は10月4日まで。

表彰は①公共施設・総合施設②商業・宿泊施設③まち・住宅・その他－の三部門から、それぞれ1点ずつグランプリ（環境大臣賞）を選定。併せて20点程度の優秀事例を選ぶ。グランプリと優秀事例は14年1月21日、省エネ・照明デザインフォーラムで表彰、取り組み事例の発表を行う。

公募要領と申請書はホームページからダウンロードできる。

問い合わせは、省エネ・照明デザインアワード事務局（☎03・5720・3759）まで。

県農政部長の後任人事

福田次長を昇格

福田　博史氏

県は19日付けで退職する中西茂農政部長の後任に福田博史農政部次長を昇格させる。また、福田次長の後任は、北野良夫獣医務技監を兼務させる。20日付けで異動する。

福田部長は、1978年3月、九州大学農学部卒業後、同年4月に入庁。2006年4月、担い手対策監、08年4月には糖業指導監、10年4月からは、農村振興課長、11年4月から現職に就いていた。

木陰

松本　光一

家督相続を復活

今、田舎では親が1人で寂しく暮らしたり、若い人がいないため、あるいは若い人に追われて泣く泣く施設に入所する人もいる。また一方では、親の老後の面倒を見るために自分の夢を捨て田舎に帰り、人によっては配偶者と別れて苦労している人がいる。親孝行者がなぜ苦労を背負い込むのか。このような少子高齢化社会の中、問題解決策の一つとして、子供と老人の幸せのために家督相続制を再検討してみてはどうだろう。

田舎で親の面倒を見ている人や面倒を見てもらっている人、また、そうでない人も含むが、山や田畑を守っている人には土地や財産は均等相続でなく、親が家督を譲る形の一括相続はどうであろうか。山や田畑が荒れると保水力が落ちて水害が起こる。「治山治水は国の要」である故、地域を守るという防災の観点からも、このような大胆な施策を提案したい。

親は、自分の家督を譲るにふさわしい子、または人に指名をしてもらって家督を譲り、安心して楽隠居をしていただきたい。当然家督を譲った親は、社会的義務も譲ることになるので自治会の奉仕作業なども免除される。家督を譲られた人には、厳然たる親の扶養義務が生じ親の社会的義務も引き継ぐ。田舎で親と暮らしている人は現在も同様で、義務だけが負担となっている。

家督を譲られた子や人も、今までの孝行の結果として感謝して受ければよい。兄弟姉妹に財産を分けるのは、家督相続者の自由にすればよいと思う。

今の民法で家督相続制がなくなったのは、その時代はそのほうがよいという考え方であろうが、今は再考が、そして早い復活が必要ではないだろうか。

経済的解決で親との同居が広まると、老人施設の不足や保育園の待機児童問題も緩和され、農業の規模確保もかなうと考える。

（㈱松本建設代表取締役社長）

※「木陰」は水曜日号の掲載となっておりますが、夏季休刊のため本日掲載とします。

謹んでおくやみ申し上げます

桑木久夫氏が死去

きょう、告別式

桑木久夫氏　丸久建設㈱の創業者で、同社相談役の桑木久夫氏が14日、死去した。79歳。きょう17日午後0時30分から葬儀告別式が執り行われる。

場所は、総合葬祭「ファミール東光山」（出水市緑町49－31☎0996・63・5561）。喪主は妻・ハルエさん。

同氏は、出水地区生コンクリート協同組合理事長など要職に就いていた。

「とホホ会」13

著者　永田　淳二

俺らが飲くと中年男性が女将に向かって、

「じゃ、十月七日金曜七時から大名で約お願いします」なんみなく言うと、女将はフンと鼻で笑って、つまらなそうに、

「分かったわ。カウンター貸し切りにしとく」女将の擦れ声が返って来た。

「では、次は『第一回とホホ会』定例報告会と、新メンバーの入会式を兼ねて派手にやりましょう」俺が声をあげて焼酎の入ったグラスを持つと後の二人も、グラスを顔の前にかざして、

「では、『とホホ会発足』を記念して乾杯」中年男が良く通る声で言った。

「それにしても精巧なカツラですね」多島さんがまじまじと中年男の頭に視線を這わせた。

「日本のカツラ技術は、すごいですよ。有名人にもつけている人が結構いますがね、一般人には見わけがつかないでしょうねカツラだって」中年男の声がさらに大きくなった。この人はまるで自分のカツラを自慢しているようにも思えた。女将は、何食わぬ顔でタバコをふかしている。

「有名人って？」さらに多島さんが絡む。

「ちょっと言えませんね。同じカツラ仲間としてね。でも私には分かるんです。光線の当たり具合でカツラは微妙に髪が浮くのです」

「マジですか？」多島さんが唾を飛ばした。

「ええ、だからカツラの人は、常に照明を気にしますね。例えば、この店だって、あなた方みたいに、私は照明の真下には絶対に座らないのです。光で不自然に髪が浮かび上がりますからね」確かに彼はいつもカウンターの隅に座っている。

（毎週金・土曜日に掲載）